

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	がわっぱ物語 : 長崎県民話(その2)
Author(s)	横山, 悌志
Citation	広大言語 , 5 : 41 - 43
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046226
Right	
Relation	



者の体験が最もよく扱われている。「31328」（1931）はトルコの捕囚となつて強制労働に服した時の苦難の自叙伝であり、「静寂」（1937）はアツティカの石ころだらけの荒蕪地に入植した小アジアからの移住者たちの生活を描いた作品である。短篇小説集「エーゲ海」（1941）でも同種のテーマが多く追求されている。「アイオリスの土」（1943）は、ギリシア人が数千年住みならわし、ヴェネージス自身が幼少期を送り、しかも今や永久に捨て去らねばならなくなつた小アジア海岸の故郷における、人間の純愛と、自然の尊美さと、さらに人間と動物や自然との交感の思い出を描いた牧歌的とも言ふべき物語りである。これはヴェネージスの代表作であつて、すでに英、独、仏をはじめスウェーデン、イタリア、オランダ、ユーゴスラヴィア其他の言語に翻訳されている。このほか多くの作品が作られているが、ここに訳出された「エーゲ海物語」もその一つで、1934年に発表されたもの。短篇ながらも不毛なエーゲ海の一島嶼に住む母と子の哀れな運命の叙述を通して、ヴェネージスの作風と彼の追求する主題の一端をうかがうことができる。

(J. O.)

が わ っ ば 物 語

—長 崎 県 民 話 (その2)—

横 山 悌 志

今回は、ぼくらの地方に伝わる河童の話をしよう。ぼくらの幼ない頃は小川や堤に泳ぎに行く時は、カッパから足を引かれないように、と注意されたものである。

おじ、今夜もまたなんかおもしろか話ばきかせんな。うゝんよしよし、そいでんおまいのごと話のしいた子はめづらしかばい。そぎやん云うぎと、今夜は何の話ばしうかにや。おゝそうたいおまや（おまえは）がわつば知つとるきや？ 知らんつてや、おじじもまあだ見たこた（<towa）なかと。ないどんがわつばは、水の中きやおつてにや、人間の尻ごはとつて喰うつちうう話たい。そいせん人間が、がわつばからとらるるぎん（とられたら）、しんのす（肛門）のポーンとすると、ほぐつとたい、（穴があくのだ）なんて！ がわつばは、今でん居るかつてや、おるおる、言う

こと聞かじ（親の言うことをきかずに）ひといで水あびどん（泳ぎに）いきよるぎ、すぐがわつばのとると。

昔しき、そりやがわつばは、うゝかつた（多かつた）。

五、六月頃の雨どんがシヨボシヨボ降る暗か晩にや、ヒョウ、ヒョウ、ヒョウつてにやあて（鳴いて）かわんふちば、そりや、よんにゆ（たくさん）川下から山ん方に登つていきよつたと。そぎやん（そのように）うゝかつたもんじやいせん（ものだから）、むかしや、村祭いん時にやがわつばのとらんおまぶいさまば（おまもりを）（親から）もろて、そいば、竹ん皮にみやあたとば（巻いたのを）糸で首にぶらさげて、あそびよつたもんたい。

こいから、おじゝの話すた、だいぶ昔の話でにや、波佐見川の土手、ふとか柳のおえとつて、そいが（その）枝の一本が水ん上さんでとるつて子どもが、ゆう（いつも、よく）乗つてピョンピョンゆさぶつて、あすびよつたつてたい。丁度そんな日も、村の百姓ん子がのつとつて歌どんうとうて遊びよつたちゆうとが、腰いさしとつた小刀ば、水んなかや、かつかえきやあたもよたい（水の中に落した様子である）。そんな時、川ん中きやおつて子どもが、あすびよるとば見よつたがわつばの頭に、そんな小刀のつきささつたもんじやいせん、がわつばは、はるきやあて（怒つて）子どもは水んなきやひつくうで（引つ込んで）尻ごぼとつたとたい。そいば聞いた子どもの親父は、子の仇ばとつてやるつちゆうて、こんごろ（このごろ）子どもがしよつたごと、柳の木にのつて、ピョンピョン枝ばゆさぶいよつたぎ、前んとて味噌ろうた、がわつばが又来とつて、水ん中から腕ばじやあて（出して）木の上の親父の足ば取ろうとしたぎ、親父はこんときとばかい、がわつばの腕ばひつつこうて（つかんで）離さんじやつたつて。親父はがわつばば水からあぎゆうつてするし、がわつばは、あがらんつて（あがるまいと）するし、そぎやんしとるうち、がわつばの腕の根元からボギツてゆうて、おつとれたつちゆうもん、親父はどうとう子どもが仇ばとつたつてゆうて、よろこびいさんで、えんちきやあつて（家に帰つて）がわつばの腕ば死んだ子どもがイヒヤ（位牌）の前に供えらしたぎやな（そうな）ところがたい、そんな晩、夜中なつてから、だいじやら表来て、戸ばたたくもんじやいせん、親父が出てみたぎ十五夜の月の冴えたそて（外に）かすりのきもん（着物）は着た片腕のなか、ななつかやつつ位の子どんが来とつて「おんちやん、腕ば返してくんない」ていうたぎやなたい。親父は、こりやがわつばかも知れんて思うて、「ふうけたこと（バカなこと）ばいうな！　ありやだれもやらんと、きやあれ、きやあれ（帰れ、帰れ）」つていうて追い返したつて。そいぎ子どもや、しよんばいして帰つたつちゆうとが、そいから、そんな子が毎晩通うてきて、七日目に「おんちやん、腕ば返してくんない、おれにやおんちやんの分限者になる薬ばおしゆるせん」つて言うちゆうもん、親父もこいにつられて

また、根負けもしたとじやろだい、がわつばに腕ば返して、そのかわい（その代り）、骨接（ホネツギ）の薬ばなるわしたとつてたい。こんくすいば人にためすぎん、ゆうきくもんじやいせん、みるみるうち、分限者になつて、骨接医者さみやならしたときやなたい。こんように分限者になつてから、「こぎやんなつたとも、がわつばのおかげ」ちゆうて、みやう年（毎年）の四月にがわつば仲間ば呼うて、ごつつおうさすぎやなどが、そんなにや、座敷んはしにやたりやに（タライに）水ば汲んでええて（置いて）、がわつばに足ばあるうて、あがるごとしてあるつちゆうとが、朝汲みたての水のよさい（夕方）なるぎ、泥水になるとぎやなばい。

え！ どぎやんごつつおうばすとじやろかつてや。そりやがわつばのお膳つてとくべちして、一家中お膳に座らすつちゆうが、家のものたあほんな竹ん子にしめばして、がわつばんたあ、老えた青竹ば輪切りしてじやあたとちゆうたい。がわつばがそいば食おうつてするぎ、かとうして（固くて）噛みええじ、人間の歯つて、おつそろしゆう強えもんちゆうて、人間の歯ばおそろしがるときやな、そうたい、そこの親父にや、がわつばの形の見ゆるときやなたい。うん、今でん、このがわつばば呼うて、ごつつおうばしよらす。

そいぎ、今夜はこいでおじゝの話もおしみやあたたい。またあすん晩に、はにやあてやるせんにや。ありや、もう寝てしもうとる。

目 と 耳 の 散 歩

宮 本 邦 彦

築摩書房から出ている「言語生活」に、カメラの散歩という項目がある。ここには、読者から寄せられた看板やポスターの珍文、誤字等が写真入りで載っている。私も先日市内のパチンコ屋の看板に「PACHINKO HOOL」と書いてあるのを写真にとつて来て、さつそく投稿したところ九月号に載った。以下、私の見かけた面白い看板の文字、表現等について御紹介することにしてよう。

市内電車の土橋と十日市の間に大衆食堂があるが、その看板には「皆さん食道」と書いてある。